

四苦八苦

おはようございます。三十年ほど前になりますが、私が出遇った出雲路いずもじ 暁きょうしやく 寂先生も、この暁天講座の講師として、この場所でお話をしておられます。そのテープを聞くと、今日と同じようにセミの声が聞こえてきます。本日は「仏教は何を教えるのか―生老病死のなかで―」という講題にさせていただきました。仏教とはいったい何なのだろうかということ、みなさんとあらためて考えてみようということです。副題を「生老病死のなかで」としました。生老病死しょうろうびようし という言葉はご存じの通り、仏教徒であろうがなかるうがよく使われています。仏教が本当に問題にしようとするテーマがこの言葉の中によく表されています。ですから、私もここから始めようと思いました。

また、みなさんは「四苦八苦」という言葉もよくご存じではないかと思えます。もうどうすることもできない、にっちもさっちもいかないような苦しみ。そのようなことを四苦八苦といい、日常語として使っていますが、何が四つで何が八つかということはあまり考えたことはないかもしれせん。

四苦八苦の四苦というのは、先ほど言いました生、老、病、死の四つです。この四つを四苦といいます。そして、さらに四つの苦しみが挙げられます。その四つは、まず「怨憎会苦おんぞうえく」。怨憎おんぞう というのは、憎かたきで、憎らしいものということです。そのような人と出会ってしまうことを怨憎会苦といえます。「会」とは出会うという意味です。とても一緒にはおれない人と出会って生活しなければならぬ、そのような苦しみです。みなさんもそのど真ん中におられると思います。これがわれわれの日常です。

次に「愛別離苦あいべつりく」。これは愛しい人と別れざるを得ない苦しみです。これも私たちの経験の中に実際にあることです。

そして「求不得苦ぐふとく」。求めているものが得られない、あるいは自分が達

成したいことがあってもそれが実現できない苦しみとも言えます。

私たちのとても大きな、代表的な苦しみは、怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦といわれ、最後にそれらと生老病死の四苦のすべてを合わせて要約した苦しみが「五取蘊苦」です。これは難しい言葉です。要するに、生きていることそのものが苦しみだということです。

このように生老病死の苦しみを言った後に、さらに苦が四つ続きますので、中国の人たちは合わせて八つということで、四苦八苦という言い方をしてきたのです。釈尊は四苦八苦という言葉は使われませんでした。生老病死とか、先ほど言いました怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦、五取蘊苦という言葉は実際にお使いになられています。しかもそれらは釈尊の最初の説法に出てきます。つまり最初の説法は四苦八苦から始まっているのです。これが釈尊の仏教なのです。仏教はいったい何を教えるのか、何を問題にするのかを考える時、このようなところに一つ取っ掛かりがあるかなと思います。そこで今日はまず、どうして四苦八苦を釈尊が取りあげられたのだろうかということを考えてみたいと思います。

また、ここには釈尊が仏陀になられたということがあります。仏陀になるとは、成仏することです。そこで四苦八苦の苦しみと、仏陀になるということはどういうふうに関係しているか、そのことを尋ねていこうとも思うわけです。これは仏教の基本中の基本ですが、それをもう一度確かめてみようと思います。

青年ゴータマ

釈尊のお名前はインドの言葉でゴータマといいます。二十九歳の時に出家されています。出家という言葉も、みなさんはなにかご存じだと思います。二十九歳といったら、どう考えても青年です。心だけは私も青年ですが。私はこの時のお釈迦さまを「青年ゴータマ」と呼んでいます。そう呼ぶことで、お釈迦さまが非常に身近に感じられるのです。

青年ゴータマは二十九歳で出家しました。どのような問題があつて出家したのだろうかということが、とても大事です。その問題を解いて仏陀になったということがあるわけですから。

仏陀になった、あるいは成仏という言葉だけはわれわれも知っていますけれども、一人の人間が仏陀になったとはどうなることなのか、それがとても大事なことです。私たち日本人の多くは仏教徒ですけれども、それを確かめることもなく仏教徒と言っているわけです。青年ゴータマが仏陀になった、これがいったい何を意味するのかということがもう一つはつきりしていません。ですから一人の人間、ゴータマと呼ばれた人が仏陀になったとはどうなったことなのかをはつきりさせたいですね。

仏陀というのはインドの言葉です。ブッダ (buddha) というインドの言葉に、音だけ表す漢字を当てているわけです。ですから、本来の意味はインドの言葉にあり、仏陀というのは目覚めた者という意味です。つまり、一人の人間ゴータマ、あるいは青年ゴータマは、三十五歳の時に目覚めた。目覚めた者と呼ばれるようになったのです。

日本語に直せばそのようなことですけれども、それだけではまだわかりませんね。目覚めた者になるとは、いったいどういうことなのだろうか。また、ゴータマ在世の紀元前六世紀から五世紀のインドという時代において、仏陀になるというのはどういう意味をもっていたのかということも考えないといけません。

たとえば「何かになる」という表現で言えば、ムラタさんでも、ミヤシタでもいいですが、ムラタさんがある会社の社長になった。これはどういうことになるのかよくわかることです。「ああ、大変な責任をもたれたのだな」とかね。あるいは、タナカさんがあそこの村の村長になった。これもわかります。「ああ、あんな年なのに村長になったのか、動機は名誉かな」とか。ところがミヤシタが仏陀になった、目覚めた者になったといっても全然わかりませんね。動機もわからないし、どうしてそんなことになったのか本当に何もわかりません。何のイメージも湧かない。ですからそれは学ばないとわかりません。仏教徒になるといっても、やはり学びが必要です。言葉を知っていればいいというだけではないのです。